



テレビの番組でエチオピアを訪れたことをきっかけに、  
難民救済や平和運動に取り組みはじめ、  
平成10年(1998年)に日本ユニセフ協会大使に就任。  
子どもたちのためなら、危険を顧みず足を運び、  
寝食をともにし、ときにはやさしく抱きしめる。  
そのぬくもりが伝わったからこそ、悲惨な経験から  
心を閉ざしてしまった子どもたちも、  
そっと心の扉を開けたのかもしれない。  
世界の子どもたちの実態を目の当たりにしてきた  
アグネスさんに、今世界の子どもたちのために、  
そして未来の子どもたちのために私たちが  
できることは何かを伺った。  
日本ユニセフ協会大使に就任して10年、  
日本でデビューして35年、  
節目の年に彼女は何を想うのか……。

自分が未来の子どもたちに  
何を残したいのか？  
そうした視点で、社会貢献を  
考えてみませんか？

歌手  
アグネス・チャン

### 私の後ろには子どもたちが いっぱいいる。

私がユニセフ協会大使のお誘いを受けたときに、感銘を受けた言葉があります。「子どもたちがかわいそうだから助けるのではないんです。子どもたちの権利を守るためなんです」

子どもたちは本来「生きる権利」「成長する権利」「保護される権利」「参加する権利」という4つの権利を持っていてユニセフではこの4つの権利を子どもたちが当たり前のように持てる世の中を作っていこうということで、「児童の権利に関する条約(子どもの権利条約)」の普及活動をしています。世界にはこの当然の権利を持ってないでいる子どもたちが、まだまだたくさんいる。

ユニセフ協会大使として実際に活動してみて痛感したのは、「かわいそうだから募金をしてください」では、世の中を変えることはできないということです。

私が大使として平成10年(1998年)に“児童買春”に取り組んだときのことです。そのとき訪れたタイでは、'80年代に流行したエイズをきっかけに、“子どもならエイズがうつらない”という間違った認識が浸透して児童買春が横行するという事態に陥っていました。その結果、子どもたちのエイズが増加し社会問題になっていました。

帰国した私は、タイでは今どんなことが起こっているのか

Lesotho  
2006 レント  
子どものエイズ問題



歓迎のために集まった子どもたちの多くが孤児だったという。



一生懸命訴えました。でも、世間もメディアもほとんど興味を示してくれませんでした。当時はまだ、“買春”という言葉も、買春禁止の法律もなかった時代です。

でも、法律を整備しなければ、子どもたちは救えない。私の後ろには子どもたちがいる、現地で会ってきた子どもたちの命がかかっていると思うと、真剣さも違います。必死でメディアに訴え続け、NGO、弁護士、国会議員、大学の先生、それこそ会う人、会う人に子どもを守るための法律を作って欲しいと懇願し、シンポジウムも繰り返し行いました。平成11年(1999年)、「児童買春・児童ポルノ禁止法」ができて、私たちの願いがやっと届きました。

だからといって、事態は好転していません。私が大使になった頃は、世界で100万人の子どもが「児童買春」や「人身売買」の犠牲になっていると言われていましたが、今では200万人！カンボジア、モルドバでは、お金に困って、親が子どもを売っている。臓器提供のために売られる赤ちゃんだっています。根本から社会そのものを変えていかなければ、本当の意味で子どもたちの権利は守れないんです。

## 募金の使い道、支援団体の活動を見守り、関心を示すことも大切な支援。

私が日本ユニセフ協会大使に就任して今年で10年目に入ります。10年前だと、5歳になる前に亡くなる子どもの数が世界で毎年1,300万人いました。それが、今では1,050万人。少しずつですが、世界の人々からの援助で成果は上がっています。

ユニセフの活動で大切なのは、集まった募金を現地でいかに有効に使うかにあります。水の調達1つにしても、給水車の手配、人の手配、どの国と交渉して国境を越えさせるのか、どうやって井戸を掘るのか、あらゆる面で考えなければならない。ほかの支援団体と連携を図っていくなら、組織力も必要になってくるし、日々、勉強です。現地のスタッフは本当によくやっています。

ユニセフのスタッフや募金をしてくれた人たちは「自分一人の力は小さいけれど、みんなで動けば大きな流れの一滴になる」って信じているんですね。私もそう信じています。

そこで、募金をしてくれた人たちや皆さんにお願いしたいことがあります。それは、募金して安心するのではなく、活動そのものに関心を持ち、募金したことに責任を持ってその先を“見守って”欲しいんです。この募金はどこに行き、どういう子どもたちにどう役立っているのか。実は、こうした“見守り”が現地のスタッフの励みになるんです。

自分たちの活動を見てくれている人がいるということが分かると、すごく嬉しいんです。

例えば新聞で、現地のスタッフの活動が紹介されたとします。読者から「感動しました！」って反応があったとしたら、それを聞いた現地のスタッフは、きっと大喜びします。その記事を書いた記者も励みになるでしょうし、また紹介しようと思うでしょう。こういう、嬉しい連鎖が起こる。実際、私が現地を訪れたとき、日本の子どもたちから預かった励ましの手紙を現地のスタッフに渡すと、みんな泣いて喜んでくれます。

みんなが関心を持って、励ましのハガキやメールを出す。それもひとつの、大きな支援だと思います。





## 「Back to School キャンペーン」 教育は未来への希望。

子どもたちにとって、水、食料、薬といった物資のほかにも必要なものがあります。それは教育です。「児童兵士」の問題で、スーダンに行ったときのことです。3万人を収容する砂漠の難民キャンプに9万人の難民がいました。水をもらうにも長蛇の列、ひどいときで2日間も待たされることがあるそうです。そのキャンプである少女と出会い、彼女の家にお邪魔したときのこと。「水がないとご飯も作れない!」と嘆いているお母さんに、「今、一番ほしいものは何ですか?」と尋ねてみました。当然、「水」と答えると思っていたんですが、そのお母さんは「子どもを学校に行かせたい。大切なのは子どもの将来だから」と言うんです。

教育は未来への希望です。将来、子どもたちがよりよい生活をしていくためにも、良い教育を受けて良い仕事に就かせたいという願いが強いんですね。人間は本来、知識を得ること、自分の知らない世界を知ることへの欲求はたいへん強い。現地では山の向こうに学校ができたと聞くと、子どもたちは大喜びで5時間でも6時間でも歩いて学校に行くんです。

東ティモールで案内された村は、内戦が終わっても、人々が「まだ安心できない」と村に戻ろうとしない状況でした。どうやったら、みんな村に戻ってくるのか、その対策を考えた末、学校を作ろうということになりました。そこで「Back to School キャンペーン」を展開しました。まず、最初にしたのは、逃げ出した先生を探すことでした。政府もない状態でし



たから、当然、国から先生への給料は払えない状態です。そこで、特別にユニセフが給料を払うという条件で、先生を連れ戻しました。そして先生が「学校が始まるよ」ってアナウンスすると、「子どもたちを学校に行かせたいから村に戻ろう。がんばって村を再建しよう」って、村人たちが戻ってきました。「Back to School キャンペーン」は、すぐ成功したプログラムとして認められ、アフガニスタンやイラクでも展開しました。

施設なんて関係ない。教師さえいれば、初めは青空教室だっただけかまわないんですよ。子どもたちは目を輝かせて学ぶことを楽しんでいました。子どもが学校に通うようになると、親にも影響が及んで、規則正しい生活のサイクルが生まれました。学校を作ることは、支援の先にある、自立へのきっかけ作りにもなるんです。

## 迷惑をかけても許される地域作り 声をかけ合って、頼り合って。

今、日本の子どもたちは、いじめ、登校拒否等、様々な問題を抱えています。その解決の第一歩として、自分の家の食卓を見つめ直して欲しい。食卓こそ家族のコミュニケーションの中心となる場であり、家族のコミュニケーションこそが問題解決に不可欠だからです。

子どもの頃、わが家に「1人では絶対ご飯を食べない」というルールがありました。父が仕事で忙しいとき、家族で父の会社の近くまで出向いて行って、家族みんなでランチを食べたりしました。自分の家族を持った今だからこそ、食卓の重要性を再認識しています。

今の日本には、大人、子ども問わず、1人で食事をする人がたくさんいます。試しに、このルールをご家庭に取り入れてみて欲しい。大げさな話ではなく、日本は変わると思っています。

地域内でも、もっと近所の人たちと声をかけあって欲しいです。例えば、おじいちゃん、おばあちゃんが外で日なたぼっこをしていると、子どもたちが学校から帰ってくる。「あれっ、何ちゃんはまだ?」「何ちゃんはお稽古事だよ」なんて、声をかけ合うことが自然と安全確認にもなってくる。また、ひとり暮らしの高齢者のところに料理を持って行って一緒に食事したり、

Iraq  
2002 イラク 紛争地問題



声をかけて運動会とか地域のイベントに誘ったりしたり。子どもたちは、そうしたコミュニケーションを身近に見ながら、地域と一緒に育っていくことが大事なんだと思います。

私はよく、お互い頼り合おう、迷惑かけ合おうって話します。そうすることで、ありがたいと感謝の気持ち生まれ、謙虚になれる。誰にも迷惑かけない、かけられたくないという関係は、やはり冷たい気がしますからね。常識の範囲なら少々迷惑かけても許される。そんな関係を地域で築くことが大切だと思います。まずはわが子のため、そして身近な地域貢献の第一歩として、わが家の食卓と向き合ってみてはいかがでしょう。

## 団塊の世代が地域を救う！ 社会貢献は身近なところから。

これからは、地域にとって明るい兆しがあります。団塊世代の大量退職のこと。これは地域にとっては朗報です。だって、日本の高度経済成長を支え、日本を世界第2位の経済大国にまでしてきた人たちが地域に戻ってくるんですよ。きっと素晴らしいコミュニケーション能力やいろんなノウハウを持っているはず。何でもできる。できないことはありません。

実際、地域ではそのノウハウが生かされてないし、そもそも地域への関わり自体が少なかった。これから、引退して時間ができるので、地域で子どもにボランティアをすれ



Sudan  
1999 スーダン 少年兵士問題

ばいい。地域貢献、ボランティアと聞くと難しいことのように思われがちですが、釣りが趣味なら子どもに釣りを教えるとか、写真を教えるとか、自分の一番好きなこと、得意なことを子どもたちに教えることでも、十分に地域に貢献できるんです。

団塊の世代だけでなく、誰もがひめた力はまだまだたくさんあると思います。それを信じて掘り起こして、誰かのために、地域のために使う。それは、ゆくゆくは子どもたちの財産になる。子どもたちに何を残すかということを考えていけばいいと思います。社会貢献は身近なところからでもできることがあります。

私が初めて日本に来たとき、日本人の優しさにたくさん触れたのを今でも覚えています。他人に対する思いやりや慈悲の心は素晴らしい。もっとその素晴らしさを広く社会貢献に生かせるはずだと私は期待しています。



歌手  
アグネス・チャン

### ◆◆プロフィール◆◆

歌手・エッセイスト・教育学博士(Ph.D.) 香港生まれ。昭和47年(1972年)「ひなげしの花」で日本デビュー。上智大学国際学部を経て、カナダトロント大学(社会児童心理学科)を卒業。昭和59年(1984年)、国際青年年記念平和論文で特別賞を受賞。翌年、食料不足で緊急事態にあったエチオピアを取材。その後、芸能活動のみでなく、ボランティア活動、文化活動にも積極的に参加する。平成元年(1989年)、米国スタンフォード大学教育学部博士課程に留学。教育学博士号(Ph.D.)取得。平成10年(1998年)に日本ユニセフ協会大使に就任。世界各地の子どもたちとユニセフの活動を視察し、世界で危機にさらされている子どもたちの現状を広く世界に訴えている。著書「みんな地球に生きるひと／Part1・Part2・Part3」(岩波ジュニア新書)他多数。新曲「そこには 幸せが もう生まれているから」「ピースフル ワールド」。

アグネスさんのユニセフでの活動や35周年イベントの詳細は  
<http://www.agneschan.gr.jp/>をご覧ください。